



新日本フィルハーモニー交響楽団
2022/2023シーズン

2023

3

March



INGO METZMACHER



EIJI OUE



3

2022/2023 Season
March

新日本フィルハーモニー交響楽団 3月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #647 石川亮子	1
すみだクラシックへの扉 #13 小室敬幸	9
楽員ストーリーズ ⑳ 杉木淳一郎 (トランペット)	15
NJP from Inside	16
2023/2024シーズン 柴田克彦の注目ポイント!	18
2023/2024シーズン 定期演奏会プログラム	24
NJP50周年誌…こぼれ話 齋藤 克	31
室内楽シリーズ	34
「バトロネージュ・システム」のご案内	36

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈ご来場のお客様へ〉

下記ご協力下さいませようお願いいたします。



Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2022-2023 Season
#647

3.4 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第647回定期演奏会
2023年3月4日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

3.6 [月]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第647回定期演奏会
2023年3月6日(月) 19時00分
サントリーホール

● ウェーベルン (1883-1945)

パッサカリア op. 1

約15分

Anton Webern: Passacaglia, op. 1

● ベルク (1885-1935)

ヴァイオリン協奏曲 *

約25分

Alban Berg: Violin Concerto *

I. Andante - Allegretto

II. Allegro - Adagio

—— 休憩20分 ——

● シェーンベルク (1874-1951)

交響詩「ペレアスとメリザンド」op. 5

約45分

Arnold Schoenberg: "Pelleas und Melisande", op. 5

[指揮] インゴ・メッツマッハー

Ingo Metzmacher, Conductor

[ヴァイオリン] クリスティアン・テツラフ *

Christian Tetzlaff, Violin *

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催: 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催: すみだトリフォニーホール [3/4公演]

■助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人 日本芸術文化振興会

公益財団法人 アフィニス文化財団

公益財団法人 花王 芸術・科学財団

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。



Message

Dear members of the New Japan Philharmonic!
I feel very honored to be invited in your Jubilee season.
I have the most wonderful memories of my visits to Tokyo,
such as the unforgettable program with works by Richard
Strauss and Edgar Varese and my concerts with your
wonderful orchestra.
You will always be my artistic home in Japan.
For the future I send you all my best wishes and can't wait to
meet and hear you again.
Arigato gozai masu!

Sincerely yours,



Ingo Metzmacher

新日本フィルの皆様

記念すべきシーズンにお招きいただきとても光栄に思っています。

東京とそして、皆さんとの数々のコンサートでは素晴らしい思い出が沢山あるのですが、とりわけリチャルト・シュトラウスとエドガー・ヴァレーズを取りあげた時のプログラムは忘れることが出来ません。

新日本フィルは私の日本での大切な芸術のよりどころなんです。

皆様の今後の未来に、私の心からの思いを送るとともに、再びご一緒できるのが待ちきれない思いです。

ありがとうございます!

インゴ・メッツマッハー

Profile



© Felix Broede

インゴ・メッツマッハー [指揮]

Ingo Metzmacher, Conductor

1957年、ドイツ・ハノーファー生まれ。革新的なプログラミングと現代音楽への深い傾倒によって卓越した存在であり、新しいものを親しみやすく、親しみのあるものを新しく響かせることに、キャリア初期から取り組んできた。

アンサンブル・モデルンでピアニスト、指揮者として活躍し、フランクフルト歌劇場でミヒャエル・ギーレンに協力。1997年からハンブルク歌劇場の音楽総監督を8シーズン務め、演出家ペーター・コンヴィチュニーと組み、21世紀のムジークテアター(音楽劇場)の先駆けとなる優れた舞台を次々と生んだ。ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、シカゴ響など、欧米の主要オーケストラへの客演も多い。2007～10年ベルリン・ドイツ響の芸術監督、続いてオランダ国立歌劇場の首席指揮者を務めた。また、ベルリン、ウィーン、ロンドン、ミラノ、パリ、チューリヒなど世界主要のオペラハウスで指揮。現在、ハノーファーのヘレンハウゼン芸術祭の芸術監督を務める。

NJPとは2010年11月に初共演。2013年9月から15年8月には“Conductor in Residence”を務めた。



© Giorgia Bertazzi

クリスティアン・テツラフ [ヴァイオリン]

Christian Tetzlaff, Violin

クリスティアン・テツラフは、引く手あまたのヴァイオリニストであり、常にエキサイティングな活動を展開している。幅広いレパートリーを持ち、古典派、ロマン派、現代のレパートリーにも精通している。ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキー、ベルク、リゲティの協奏曲の解釈でニュー・スタンダードを打ち立て、革新的な室内楽プロジェクトやバッハのソロ作品の演奏で高い評価を得ている。カーネギーホール、ウイグモアホール、ベルリン・フィル、チューリッヒ・トーンハレ管、フランクフルト放送響のアーティスト・イン・レジデンスをつとめたテツラフは、2021/22シーズンに再びウイグモアホールのアーティスト・イン・レジデンス、2022/23シーズンにはロンドン交響楽団の「ポートレート・アーティスト」に選出されている。録音では、バルトークの協奏曲の録音やベートーヴェンとシベリウスのヴァイオリン協奏曲の録音で数々の賞を受賞している。室内楽では1994年にテツラフ・カルテットを結成、また妹のターニャ・テツラフ、ピアニストの故ラルス・フォークトとのトリオでも活動した。

「なぜベルクなの？同じウィーンの作曲家ならシューベルトにしたらいいのに」。ベルクを研究しようとウィーンに留学した私に、現地の人々が何度となく口にした言葉に、今さらながらに新ウィーン楽派（シェーンベルクとその弟子、ウェーベルンとベルク）が置かれた立場を思い知らされた。しかしながら一方で、1910年代はじめ、彼らは「若きウィーン楽派」と呼ばれていたことをご存知だろうか。当時の記事には、「ハイドンとヨハン・シュトラウスの国に集まった、このグループの若き作曲家たちの作品が、きっとベートーヴェン時代の音楽の栄光をよみがえらせることになるだろう」と期待を込めて述べられている。本日演奏されるのは、若きシェーンベルクとウェーベルン、それから最晩年のベルクの作品。音楽における伝統と革新とは何なのか。三者三様のあり方を聴いてみることにしよう。

■ ウェーベルン：パッサカリア op. 1

卒業作品op.1の誕生 ▶

1902年からウィーン大学で音楽学を学んでいたアントン・ウェーベルン（1883～1945）が、シェーンベルクの弟子となったのは1904年秋のこと。1906年にルネサンスの作曲家、イザークの研究で博士号を取得したウェーベルンは、作曲家としても「卒業」を意識するようになる。ウェーベルンの作品1となった「パッサカリア」は、1908年11月4日、作曲家自身の指揮で初演された。

師からの影響 ▶

シェーンベルクはレッスンで、バッハ、ベートーヴェン、シューマンやブラームスの作品と一緒に分析しながら、自らの個性を深めるだけでなく、伝統を重んじることを教え込んでいった。「パッサカリア」には確かに、冒頭の弱音でとぎれとぎれにつぶやく弦楽器のピッツィカートのように、後のウェーベルンを予感させる部分もある。しかしながらこの曲が、ブラームスの交響曲第4番のフィナーレ楽章を手本として、またシェーンベルクが好んだ二短調で書かれていることは見過ごせないだろう。

曲の特徴 ▶

バロック時代にはシャコンヌとほぼ同義に使われた、舞曲かつ低音旋律に基づく変奏曲であるパッサカリア（ただしここでは伝統的な3拍子ではなく、葬送行進曲風の2拍子となっている）。曲は主題に続いて23の変奏とコーダからなる。

[楽器編成]フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、ハープ、弦楽5部。

■ ベルク：ヴァイオリン協奏曲

曲の成立を表す2つの献辞 ▶

新ウィーン楽派の作曲家が12音技法によって書いた、最も美しく感動的な作品——。アルバン・ベルク（1885～1935）が完成した最後の作品

となったヴァイオリン協奏曲には、「ルイス・クラスナーのために」と「ある天使の思い出に」の2つの献辞が添えられ、また曲中の2つの引用（民謡とコラル）が多様な響きと解釈をもたらしてきた。

完成の経緯 ▶

オペラ「ルル」を作曲中のベルクに、アメリカのヴァイオリン奏者クラスナーから協奏曲の依頼があったのは、1935年2月のことだった。4月22日、アルマ・マーラーと建築家グロピウスの娘、マノンが18歳で死去。マノンを天使と呼んでかわいがっていたベルクは、アルマに新しい協奏曲を「ある天使の思い出に」、すなわちマノンのためのレクイエムとして捧げる許可を求めた。ベルクは5月から、ヴァルター湖畔で作曲に集中（同じ湖のほとりでブラームスもヴァイオリン協奏曲を書いたことを、ベルクは常に意識していた）。7月16日、スケッチの完成をクラスナーに報告。異例のスピードに誰よりも驚いたベルクだったが、同じ年の12月24日、書きかけのオペラ「ルル」を残して50歳で生涯を閉じることになったのだった。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章はマノンの音楽的ポートレートと言えるもので、「アンダンテ（序奏）」と「アレグレット（スケルツォ）」からなる。第15小節から独奏ヴァイオリンが基本音列（ソ・シ♭・レ・ファ♯・ラ・ド・ミ・ソ♯・シ・ド♯・ミ♭・ファ）を提示する。音列は短調、二長調、イ短調、ホ長調の主和音と全音階からなり、ここからやわらかな音調が生み出される。優美な舞曲が聞こえるところからスケルツォ。コーダの直前に、1つ目の引用であるケルンテン民謡の「スモモの木の子」が、ヨーデル風のエコーを伴って姿を現わす。

第2楽章は「アレグロ（カデンツァ）」と「アダージョ（コラル）」。突然の破局と死の慟哭。それから2つ目の引用、「J.S. バッハによる60のコラル集」から「もう十分です！^{いかすち}主よ、もし御心にかなうのなら」のコラル（カンタータ「おお永遠、そは雷の言葉」BWV 60の第5曲コラル）が、原曲のイ長調を変ロ長調に移して歌われる。最後はマーラーの「大地の歌」と同じく、付加6の和音（シ♭・レ・ファ・ソ）のなかに溶け合わされていく。

[楽器編成]ヴァイオリン独奏、フルート2（ピッコロ2持替）、オーボエ2（イングリッシュホルン2持替）、サクソフォン（クラリネット持替）、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、吊しシンバル、トライアングル、タムタム、ゴング、ハープ、弦楽5部。

■ シェーンベルク：交響詩「ペレアスとメリザンド」

メーテルランクの戯曲から ▶

中世アルモンド国の王の孫グローは、森に迷い、泉のほとりで泣いているメリザンドと出会う。2人は結婚するが、グローには異父弟のペレアスがいた。グローはペレアスとメリザンドの関係を疑うようになる。そして——。おそらく「水の精」（ドイツ・ロマン派ではウンディーネと呼ばれる）である

うメリザンドに魅了されるように、世紀転換期のヨーロッパには、「青い鳥」で知られるベルギーの劇作家、メーテルランクの戯曲「ペレアスとメリザンド」から様々な音楽が生まれた。なかでもドビュッシーのオペラ（1902年4月初演）は有名であろう（シェーンベルクが当時、このオペラを知っていたかについては諸説ある）。

交響詩として完成 ▶

それらとアルノルト・シェーンベルク（1874～1951）の作品が大きく異なっているのは、それが交響詩であることかも知れない。1901年にツェムリンスキーの妹マティルデと結婚。ベルリンにやって来たシェーンベルクに、R.シュトラウスは何かと仕事を斡旋しつつ、「ペレアスとメリザンド」のオペラ化を勧めた。「ペレアスとメリザンド」は1903年2月に完成。後にシェーンベルクは、オペラではなく交響詩としたことに後悔の念にじませつつも、交響詩が「様々な雰囲気や人物を、厳密な形式を持つ音楽的単位のなかで表現することを教えてくれたのです」と語っている。

曲の構成(単一楽章)と音楽の特徴 ▶

シェーンベルクがここで実現したのは、物語を音で描く一方で、多楽章の内容を含みながら、長大な単一楽章の作品を構築することだった。以下、4つの部分に分けて全体の流れを追っていこう。

第1部は森の場面から始まる。ここで聴かれる「運命の動機」は、曲全体で重要な役割を果たす。ゴローとメリザンドの出会いと結婚、メリザンドのペレアスへの愛の目覚め。美しく情熱的なゴローの主題を第1主題、若々しく騎士的なペレアスの主題を第2主題として、ソナタ形式の提示部と分析される。

第2部は3部分からなる。スケルツォ的な音楽（泉のほとりてたわむれるペレアスとメリザンド）。塔の場面では、メリザンドの長い髪をペレアスが撫でながら語らう。そしてゴローがペレアスを城の地下の墓所に導く場面は、管楽器の斬新な奏法が不気味な雰囲気を助長する。各部分を中断するように、ゴローの疑いと嫉妬が渦巻く。

第3部は緩徐楽章にあたる。ペレアスとメリザンドの愛の場面は、ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」の第2幕を思わせる官能的な響きにあふれている。そこに剣を手にしたゴローが現われ、ペレアスを突き刺す。

第4部はフィナーレ楽章、かつソナタ形式の再現部。憔悴したメリザンドに、ゴローは執拗にペレアスとの関係を問いただす。メリザンドの死。続くエピローグでは、ゴローの主題と「運命の動機」がゴローの深い絶望を描きながら、二短調の主和音のなかに終わる。

[楽器編成]フルート3(ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ3(イングリッシュホルン持替)、イングリッシュホルン、Es管クラリネット、クラリネット3(バスクラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン8、トランペット4、トロンボーン5、チューバ、ティンパニ2、大太鼓、シンバル、テナードラム、トライアングル、タムタム、グロッケンシュピール、ハープ2、弦楽5部。



ほほえみがふえていく、
未来がいいね。

オリックスグループは、
サステナブルな社会をめざして、
環境保全や、未来を担う子どもたちへの支援など、
社会貢献活動に取り組んでいます。

マングローブの植樹活動

学校建設の支援

福祉車両の寄贈

自然体験教室の開催

クラシックコンサートに
子どもたちをご招待

子ども食堂への支援

子どもの教育支援
© Room to Read

宝塚歌劇団 舞空 瞳



オリックス